

研究計画概要書

研究課題名	がん患者家族への予後告知に対する支援
研究責任者 (所属・職名・氏名)	名古屋大学医学部保健学科看護学専攻臨床看護学講座 教授 安藤詳子
研究分担者 (所属・職名・氏名)	名古屋大学医学部保健学科看護学専攻 4年 花村美紅
共同研究者 (所属・職名・氏名)	該当なし
研究事務局 (機関の名称・住所・連絡先)	名古屋大学大学院医学系研究科 看護学専攻 安藤研究室 住所：名古屋市東区大幸南1丁目1番20号 連絡先：052-719-1553
研究の意義・目的	<p><意義></p> <p>予後告知は終末期がん患者の家族と医療者双方にとって困難を伴う課題であり、告知を行うべきか否か、ということについては長年にわたり議論が重ねられてきた。終末期におけるさまざまな意思決定のために予後告知が必要であるとされる一方で、告知を行うことで患者に心理的苦痛がもたらされ、希望を失うことが懸念される。これまで、告知に対する患者の意向に関しては数多くの研究が行われ、患者の意向を確認しながら告知すること、患者のコントロール感を支えることなどの重要性が指摘されてきた。これらを通して、患者の希望を支え、かつ来るべき死に向けた準備を促すことが医療者に期待されている。日本においては、多くの場合、患者よりも先に家族に対して余命を伝えられ、患者にどのように告知することか、家族が判断することが多い。また患者も判断を家族にゆだねることを希望する場合もある。</p> <p><目的></p> <p>がん患者家族への予後告知の支援に対して病棟看護師の属性による違いを分析し明らかにする。</p>
分析の対象	全国の国指定及び県指定のがん診療拠点病院の、緩和ケア病棟および呼吸器内科病棟を有するがん診療連携拠点病院を対象施設とする。調査対象施設に勤務する緩和ケア病棟看護師と、一般病棟看護師の約500名を分析の対象とする。
実施計画	研究代表者である安藤詳子氏のもと、本学大学院博士後期課程在学中の宇根底亜希子氏が平成31年に実施した調査（倫理審査番号：18-133）のデータの一部を用いて分析する。研究の調査は以下の手順で実施された。全国の国指定及び県指定のがん診療拠

	<p>点病院の、緩和ケア病棟および呼吸器内科系病棟を有するがん診療連携拠点病院を対象施設とした。その2つの病棟に勤務する看護師を調査の対象とした。対象施設の病院長、看護部長に研究説明書及び依頼文書を送付し、調査依頼し同意が得られた施設において対象者応じた郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。調査項目は、対象者背景（性別、年齢、最終学歴、専門資格、取得資格、経験年数、所属病棟、研修会参加状況、看取り経験、ギアチェンジに関する考え）、医師との協働（Collaborative Practice Scales 日本語版）、患者とのコミュニケーションスキル測定尺度、死生観に基づくケアへの態度（FATCOD-B-J 尺度）、がん患者家族の“死と喪失の準備”に対する支援である。本研究では対象者背景とがん患者家族の“死と喪失の準備”に対する支援の既存データを用いる。データ提供、データ管理の手順については個人情報の保護の方法を参照。</p> <p>【分析方法】 がん患者家族への予後告知に関する支援内容について集計し、カイ2乗検定等を用いて対象者背景など関連要因を分析する。</p>
研究機関	実施承認日から令和2年3月31日まで
被験者などに対するインフォームド・コンセント	研究代表者である安藤詳子氏のもと、本学大学院博士後期課程在学中の宇根底亜希子氏が調査した匿名化された既存情報を用いる研究であり、個人を特定できず拒否機会を保証できないため、研究情報の公開のみ行う。情報公開は研究計画概要書を「保健学臨床・疫学審査委員会」ホームページに掲載して行う。
個人情報の保護の方法	使用するデータは、研究代表者である安藤詳子氏のもと、本学大学院博士後期課程の宇根底亜希子氏の研究にて収集された既存のデータで、両者の承認を得た。データは完全匿名化となっている。研究期間中は紙媒体とCDを名古屋大学大学院医学系研究科の安藤研究室（本館1階101号室緩和ケアラボ）の専用の鍵付きキャビネットに保管し、研究終了後10年間保管して、データを紙媒体はシュレッターかけ、にCD等は破碎し復元できないように完全に消去する。情報は厳重に管理し、研究以外には使用しない。卒論発表会などの研究成果の公開時には、対象施設などの公開は行わない。